

現代語助動詞「た」の原理

半 藤 英 明

一、論点

本論は、現代語助動詞「た」をテンス(過去)、および、アスペクト(完了)の観点ではなく、物事の成り行きが変化することを広範囲にわたり表示する、簡潔に言えば、事態変化をマークする、と見る立場から論ずる。

古典語では、概ね「き・けり」が過去、「たり・り・つ・ぬ」が完了の助動詞とされるが、現代語では、「た」がそれらの過去・完了を集約して担う。そのことは、現代語「た」がテンス・アスペクトの面に関し、かなり汎用性の高い存在であることを思わせる。「た」

は、古典語「たり」から「転じた語」とされる(明治書院『日本語文法大辞典』、山口明穂執筆)が、「たり」の用法よりも多様化しており、もはや古典語「たり」の分析とは切り離す形で論ずることも十分可能である。

テンス・アスペクトの「た」の意味用法としては、概ね、過去、経験、完了が指摘され、他に属性所有(「似た顔立ち」「とがった塔」の類)も指摘される(学燈社『古典語 現代語 助詞助動詞詳説』、田中章士執筆)が、次のような例は、それらから外れる。

- 1 こんなところにあつた。
- 2 あすは、アルバイトの日だった。
- 3 早く行つた、行つた。

これらは、いずれも「こんなところにある!」「あすは、アルバイトの日だ!」「早く行け、行け」とほぼ同義であり、テンス・アスペクトのものとしては容易に理解し得ない。このように発話時の認識に当たる「た」は、それぞれ1「発見」、2「想起」、3「命令」を表現するムードの「た」と呼ばれる。また、次例は「後悔」の「た」と呼ばれるが、そこには「強調」の役割が指摘されることもある。

4 やってしまった。(皿を割った際に)

これらのムードとしての意味用法が、過去や完了をマークすることと如何に連関するのか、という点は問題とされなければならない。⁴しかも、例文4「やってしまった」(Ⅱ「やっちゃった」)で言えば、例えば、これが宝くじを当てた場面ならば「驚き」(または「喜び」)の意味になることもできるから、文脈によって意味用法が変化するということでは、ムードの「た」には、その前提としての原理が存在するとも考えられる。本論の見方では、「た」に見られる多数の意味用

法は、「た」が構文にもたらす原理的な働きを反映した結果に基づいている。

二、仮説

有精堂『日本文法事典』には、テンス①とアスペクト②が次のように解説されている。

- ①日本語における時制とは、動作や作用が発話者や認定者とのような時間的な関係にあるかを表現し分ける、述語の、特に動詞の、形態的なありかただ、といえよう。時制は、形態的な問題であるとともに、また意味論的な問題でもある。
- (106頁、仁田義雄執筆)

②動詞の表す動作・作用の全過程のどの部分に焦点を置いて、動作・作用を把握・表現するかの違いを「相(アスペクト)」と言う。したがって、相は、動詞の文法的な意味の一種であり、日本語では、動詞に補助動詞が接合するという複合動詞化によって表される。

(114頁、仁田義雄執筆)

つまり、テンス・アスペクトの「た」は、意味内容に時間的経過が潜在的に関わる動作・作用の動詞(Ⅱ「動作動詞」)。便宜上、「消える」「死ぬ」のような「瞬間動詞」を含める)と深く関わることになる。まずは簡単な文例で辿る。

5 昨日、雨が降った。(テンスの範疇)

6 やっと立った。(アスペクトの範疇)

一般に、例文5は、過去(昨日)には「降っている」が、発話時に於いては「降っていない」という意味的感受が為されるであろう。これは、過去と発話時との事態変化を認識している、ということである。6では、それまでの「立っていない」状態が「立つ」状態に変化したことを表している。井上優(二〇〇一)によれば、『(モウ)シタ』における『発話時までに来事が実現済みである』という意味は、『シタ』という言語形式によって表される意味というよりは、／当該の出来事が『発話時の前後を含む一定の区間内のど

こで実現されてもおかしくない』という属性を有する。／ということから生ずる付随的な意味である」(125頁)とされるが、結果として事態変化が生ずることは重視されるべきことであると考える。

状態を表す動詞(Ⅱ「状態動詞」)。便宜上、「聳える」「優れる」のような「特殊動詞」を含む)や形容詞に付く「た」にも、同様の指摘が可能である。

7 かつて、そこに机があった。(テンスの範疇)

8 ようやく模型ができた。(アスペクトの範疇)

9 昔、若かった。(テンスの範疇)

10 今まで白かった。(アスペクトの範疇)

例文7では、過去(かつて)には「ある」が、発話時には「ない」という意味的理解がされ、8は、発話時までは「できていない」ものが発話時には「できていない」ことを表している。これらにも、発話時までには事態変化がある。また、9は、過去(昔)は「若い」が、発話時には「若くない」という意味であり、10では、それまでの「白い」状態が「白くない」状態に変

化したことを表していると解される。これらも、結果として事態変化が生じたことを表している。⁷⁾

一方、名詞述語文での「た」は、名詞の意味内容と関わる形でテンス・アスペクトが現れる。

11 昨日、氷だった。(テンスの範疇)

12 今まで氷だった。(アスペクトの範疇)

「水」は「氷」へと変化する性質のものであるため、時間的経過が意味を持つことがあり、そのようなモノ名詞ではテンス・アスペクトの「た」が現れると考えられる。しかし、次のような場合は、アスペクトの「た」は現れにくい。

13 昔、学校だった。(テンスの範疇)

* 14 さっきまで学校だった。(アスペクトの範疇)

例文13は、過去(昔)には「学校である」が、発話時には「学校でない」という意味的理解がされる文であるが、14は、通常では「さっきまで学校だったものが急に学校でなくなる」のような理解となり、常識的に非文である。これは「学校」というモノ名詞が時間

的経過との連関を薄くしていることに関係しよう。同様のことは、コト名詞にも言える。⁸⁾

15 昨日の練習は、きつい運動だった。(テンスの範疇)

16 今の練習は、きつい運動だった。(アスペクトの範疇)

「運動」には動作性があり、しかも「運動」は、時間的捉え方(始まりから終わり)が可能なコト名詞であるため、テンス・アスペクトの「た」が現れる。しかし、次掲のように時間的捉え方が必然として要請されないコト名詞では、アスペクトの「た」は現れにくい。

17 あのバスの運行経路は、昨日まで循環だった。(テンスの範疇)

* 18 あのバスの運行経路は、さっきまで循環だった。(アスペクトの範疇)

例文17は、発話時には「循環でない」という意味の文となるが、循環から非循環への短時間での移行が想

定されにくい18の発話は、極めて限られた場面のもの
で、通常では非文である。即ち「循環」というコト名
詞も、時間的経過との連関が薄いものであると考えら
れる。

これらのことは、テンスが発話者の認識に基づくも
のであり、上接語の意味内容とは直接に関係せず、且
つ、文に対しては普遍的なものであるのに対し、アス
ペクトが上接語の意味内容に頗る関係していることを
示すものである。

但し、上記の名詞述語文いずれにも、文意情報に事
態変化が生ずることは見て取れるところである。例文
11・12は、発話時には「水でない」のであり、ともに
事態変化がある。例文15・16も、ともに発話時には
「きつい運動」の事態にはないというものである。従
来、アスペクトの問題として、(動詞に於ける)動作
の結末や変化した後の結果の問題は、しばしば指摘さ
れるところであるが、本論は「た」そのものが事態変
化を象徴的に担っているという見方に立つ。森山卓郎

(二〇〇〇)には、状態動詞やテイル表現などの状態
的な述語が名詞を修飾する場合はル形とタ形の両方を
使用することがあるが、「変化のない性質を言う場合
(性質を一般的に述べる場合)には、タ形にはせず、
「その性質が変化してしまったということを表す場合
や特定の場面を回想するような場合(いずれも、時間
の流れを意識する場合)にはタをつけることができる」
(169頁)との指摘がある。

ところで、次のような事例については、如何に扱う
べきであろうか。

19 ウォーターゲートの時の「特別検察官」のこ
とが念頭にあり、この場合、だれが適当にかにつ
いても私は腹案を持っていたが、その名までは
言わなかった。(筑紫哲也「ニュースキャスター」)
それぞれの「た」は、発話時から見て一定の過去の
事態を表しており、テンスの範疇にあるものと考えら
れる。が、その文意から「今は腹案を持っていない」
「今はその名までを言っている」という意味までは感

受されない。寧ろ、それぞれから「今でも腹案を持っている」「今も言っていない」の解釈が浮上すること否定しにくい。そのような理解の場合、事態変化は生じていないとの反論が考えられる。

山口明穂(二〇〇〇)は、「た」は事態の実現を話し手が確認したことを表す語である(207頁)と括っており、上記19の「た」は、そのような理解に収まるのではあるが、「た」が事態変化をマークするという観点からすれば、過去には「腹案を持つて」おり、「その名までは言わない」事態であったが、発話時は「腹案を持つている」ことを継続しなければならぬ事態ではなくなったし、「その名」を言ってもよい事態に変化している、という意味に於いて別の事態となっており、その点での事態変化がある、と見る。例えば「事件があった」は「今は事件がない」や「今は事件ではない」という事態変化ではなく、既に過去となった事態に対し、発話時には発話時として別の事態になっているという意味の事態変化がある、ということであ

る。「昨日、歯が折れた」では、現状も折れた状態であるとしても、「歯が折れた」事態は過去のことであり、その時からすれば、発話時はもはや別の事態であると捉えている、ということになる。つまり「た」は、過去の事態を示しつつ現状を暗示し、また、過去の事態からすれば新たな事態の発生を示すのであり、その間の事態変化の内容は、ほぼ特定のなものであるが、ここでのように過去の事態と発話時の事態とを相対化し、そこに変化の認識があることを表すものとして、漠然とした事態変化の認識、即ち、事態変化として特定の内容を想定しないものをも担うことがあると思われる。

そこで、まずここに、現代語の「た」は、文意情報上、事態変化をマークするとの仮説を立てることにする。

三、実例

前節での仮説を、実例により確認してみたい。以下に、動詞述語文 (a)、形容詞述語文 (b)、名詞述語文 (c) に分けて、小説、評論からの実例を挙げる (梅 || 梅崎春生「鏡」、筑 || 筑紫哲也「ニュースキャスター」に拠る)。後述するが、文章語の「た」は存外、実質的な意味の薄い使われ方が多い。

- (a) 20 私は視線を走らせた。(梅)
- 21 日々険しくなっていくことが自分でもわかった。(梅)
- 22 給仕女は出て行った。(梅)
- 23 私は老人の顔を盗み見ていた。(梅)
- 24 老人は眼をぎらぎらと光らせた。(梅)
- (b) 25 室は狭くて暗かった。(梅)
- 26 負った傷は大きかった。払った代償もまた大きかった。(筑)
- 27 そして、それ(注、人間関係)が残っている
- 28 が、(大地震直後の)日本という「システム」はひどかった。(筑)
- 29 箱根、伊豆など都外で一泊ということが多かった。(筑)
- (c) 30 社長というのは四十位の痩せた眼のするどい男であった。(梅)
- 31 この帳簿は、税務署が調べに来た時提示するためのものであった。(梅)
- 32 私が彼に仮託した欲望の像であった。(梅)
- 33 心をこめてそう言ったつもりだった。(筑)
- 34 私はふと、思ってみたりするのであった。(梅)
- 吉田金彦(一九七二)は、『た』を用いなければならない時と、どうでもよい時との二つの場合がある(27頁)とした上で、「小説の情景の展開や印象描写に『た』止め文が用いられる。この『た』は発現の『た』である。このような『た』止め文も、『た』を省略し

て現在形でいうことはできる」(235頁)と述べている。先の実例中で、それに該当するのは次である。「た」を省いた現在形の形も併せて掲げる。

20 ↓私は視線を走らせる。

21 ↓日々険しくなっていくことが自分でもわかる。

25 ↓室は狭くて暗い。

26 ↓負った傷は大きい。払った代償もまた大きい。

27 ↓それが残っている所ほど、その後の立ち上がり
りが早い。

30 ↓社長というのは四十位の痩せた眼のするどい
男である。

31 ↓この帳簿は、税務署が調べに来た時提示する
ためのものである。

32 ↓私が彼に仮託した欲望の像である。

33 ↓心をこめてそう言ったつもりだ。

34 ↓私はふと、思ってみたりするのである。

このような「情景の展開や印象描写」の「た」は、
動詞述語文・形容詞述語文・名詞述語文の区別なく用

いられるが、私見によれば名詞述語文に特に多い(名詞述語文が「だ」「である」を伴う判断文の形式にあることに関係しようか)。意味的には過去の事態を回想的に表現するものであり、前掲のムードの「た」に近いとも考えられる。嘗て、山田孝雄(一九三六)は「(た)の」意義は汎くして決定の外回想をあらはすものとしても用ゐらる」(354頁)と述べ、「た」が「回想をあらはす」ことを指摘している。

吉田(前掲)は「(た)止め文は表現が明晰で、これの多い作品は簡切れよく簡潔でよみやすい。したがって『た』止めの多い小説は、あまり個人の主観や主張を出さず、客観的に事件を描写しているものに向いている」(247頁)とも述べており、「た」の叙述が回想的になることには「客観的に事件を描写している」ことも関係すると考えられる。なお、工藤真由美(一九九五)によれば、「テンスの意味は、客観的ではあり得ず、常に、発話主体の心的態度とからみあっている」(183頁)のであるが、過去の事態を回想的に表現する

ムード的な「た」が客観的な事件の描写に向いているとすれば、それは、前述のように、「た」が事態変化という客観性に関わるからではないかとも推察される(ムード的な「た」と事態変化の関わりについては次節に述べる)。

しかも、それらの文はテンス・アスペクトの要素を稀薄にしているということにもなる。明確にテンス・アスペクトの要素を持ち得る「た」は、文脈上、「た」の省略により元の文意が損なわれる。

その点で言えば、例文22は、給仕女が出て行って、発話時にはその場にいらないことを表現したものであり、「た」の存在が必要である。23・24は、過去の事態を述べたもので、発話時に「盗み見ている」事態、「眼をぎらぎらと光らせる」事態にあるというものではなく、「た」を必要とする。28も、過去の事態であり、現在もなお「ひどい」ということではない。29は、現在でも「都外で一泊ということが多い」という文意ではない。従って、いずれにも次のような言い換えは効

かない。

22 ↓ 給仕女は出て行く。

23 ↓ 私は老人の顔を盗み見ている。

24 ↓ 老人は眼をぎらぎらと光らせる。

28 ↓ が、日本という「システム」はひどい。

29 ↓ 箱根、伊豆など都外で一泊ということが多い。
しかしながら、それらがテンス、アスペクトのどちらの範疇にあるのか、即ち、過去、完了のどちらの意味にあるのかは、截然と区別し得ない部分もあるかと思われる。即ち、例文28・29の形容詞述語文の「た」は、過去の事態を述べたものであるが、例文22・24のような動詞述語文の「た」では、過去の事態として把握可能なことは勿論であるが、事態の完了を表すアスペクトの表現であることを否定しにくい。

35 竹一の子言の、一つは当たり前、一つは、はずれ
れました。惚れられるという、名誉ではない
子言のほうは、あたりでしたが、きつと偉い
絵画きになるとい、祝福の子言は、はずれ

ました。

(太宰治『人間失格』)

これらの「た」も、現在形の表現で代用することが適わず、テンスかアスペクトかをマークしているということになるが、どちらであるとは特定し難い。金水敏(二〇〇〇)は「時制性^⑨とアスペクト性の切り分けの難しさ」を指摘している(54〜57頁)。

本論としては、そのような曖昧さを不都合と見、このような「た」も事態変化をマークしていると考ええる。例文35については(例文19に類するもので)、テンスの立場で考えるとすれば、予言が「はずれる(はずれず)」^⑩「あたる(あたります)」といった事態は過去のもので、発話時に於いては別の事態であるという意味での事態変化がある、と解する。また、アクペクト的な理解をするならば、発話時までの「はずれない」事態が「はずれる」事態へと変化したものと解することもできる。

このように、文章語の実例を見ると、現代語「た」には、ムードの「た」に近い回想的なもの、また、テ

ンス・アスペクトの区別を曖昧にする例がかなり多い。そもそも、「た」を使用する場合は、テンスの「た」か、アスペクトの「た」かの区別が明確なものは当然にあるものの、それほど厳密な認定をせず、時間的な断絶(＝現在に至る過去の時間と現在以降の時間とを分かつもの)をイメージするものとして使用している場合が多いのではないか。山口明穂(二〇〇〇)は「た」が文末で過去の意味に偏るのは、文末では、話をしていく『今』を基準にするので、『今』という時点で事態を確認すれば、それは過去のことになるという、文脈から現れる意味である」(207頁)と述べている。そのようなことをも考え併せると、現代語「た」をテンス・アスペクトの論理だけで捉えることには限界があるとも言い得る。

四、ムードの「た」の扱い

「た」を文意情報上、事態変化をマークするものと把握することでは、前掲1〜4のような「た」につい

ても、説明が適う。

- 1 こんなところにあつた。(発見)
- 2 あすは、アルバイトの日だった。(想起)
- 3 早く行った、行った。(命令)
- 4 やってしまった。(後悔、または強調)

例文1の「た」は、発話時以前には「ない」事態であつたものが「ある」事態に変化したことをマークしていると考えることができる。2は、発話時以前には「アルバイトの日ではない」と思っていたところが「アルバイトの日だ」と認識が改まったところが「た」が担う。3では(平叙文の形式ながら実質的には命令文であることで特殊な事例ではあるが)、それまでの「行っていない」事態を変化させて「行く」事態を實現したいという認識のもとに付されるものと考えられる。4は(「後悔・強調」の意味については「てしまう」の形式に関わるものと考えられるが)、「た」そのもの問題としては「やって(しまつて)いない」状態が変化して「やってしまつ」状態になつたことをマー

クしていると考えられる(但し、本論の立場では、例文4は「やってしまつ」と現在形では表現できないため、アスペクトの表現であつて、ムードの「た」とはしない)。

しかしながら、実は、ムードの「た」の類(前節での回想的な「た」の例をも含む)が現在形の表現形式とほぼ変わらない(前述)ということでは、それらは文意の構成素としては文に参加しておらず、事態変化の在り方も、テンス・アスペクトの「た」に於いて指摘したものとは異質である可能性がある。金水敏(二〇〇〇)は、「AがBであること」を示す「靜的述語」に「た」を用いることに關し、「内容自体の外的な出来事的側面ではなく、話し手がその内容に關する情報にいつどのような形で接したかという点に深く關わっているようである」(64頁)と述べているが、ムードの「た」の類は、そのように発話の態度に關わっていない。

前節で述べた吉田による「発現」、また、山田によ

る「回想」の「た」については、文意情報上の事態変化では把握できない。私見では、それらは全文体の表出そのものを事態変化とするものであり、テンス・アスペクトによる意味的な事態変化のレベルとは異なるところにあるものである。小説・物語の語りのように、発話時に過去の事態として（回想的に）表現する「た」に於いては、事態変化とは主に叙述の進行に伴って文章が次々と書き足されていく過程で、無（表現されていない状態）から有（表現された状態）に展開されることを直接的に示すものとして実現される。それは、表現しようとすべき内面的認識を着実に表現化したことを確認する標識でもある。即ち、そのような「た」の役割は、そこで文としての叙述が完成することを担うへ叙述の完成としての「た」である。次は、夏目漱石『吾輩は猫である』の一節である。

36 漸くの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考へてみた。別にこれという分別

も出ない。暫くして泣いたら書生がまた迎ひに来てくれるかと考へていた。ニヤー、ニヤーと試みにやってみたが誰も来ない。その内池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所まであるこうと決心をしてそりそりと池を左に廻り始めた。どうも非常に苦しい。

これらの「た」をテンス、または、アスペクトのものとして解することは可能であろうが、繰り返すように、我々は必ずしも「た」が過去のなか完了なのかを一つ一つ確認し、確信しながら使用しているばかりではない。従つて、表現を理解する側の解釈も、必ずしも確定的でない場合がある。更に、例文36は、「た」の前後が現在形の語りであることからして「た」のない現在形で続ける文体が十分可能であり、「発現」もしくは「回想」の「た」とも解される。

次例は『人間失格』からの引用であるが、これも同

様である。

37 第二葉の写真の顔は、これはまた、びっくり

するくらいひどく変貌していた。学生の姿で

ある。高等学校時代の写真か、大学時代の写

真か、はっきりしないけれども、とにかく、

おそろしく美貌の学生である。しかし、これ

もまた、不思議にも、生きている人間の感じ

はしなかった。学生服を着て、胸のポケット

から白いハンケチを覗かせ、藤椅子に腰かけ

て足を組み、そうして、やはり、笑っている。

これらの「た」も、テンス・アスペクトの「た」か、

「発現」「回想」の「た」かは、解釈次第である。が、

現在形の表現のものに代えても都合がないことは

後者の可能性がある。このような「た」を、工藤（前

掲）は「いわば〈叙述詩的現在性〉」という扱いをし

ており、「かたりのテキストでは、現実の発話主体に

よる発話行為の場へのアクチュアルな関係づけが存在

しないゆえに、過去形が、過去というヘダイクティッ

クな現実的時間を表象せず、¹⁰ 非現実的時間＝叙事詩的時間として機能する」（21頁）としているが、意味的な時間の概念から遠い、「非現実的時間」を表す「た」の役割は、語りに於ける叙述の完成をマークするものになっていると読み替えることができる。このような「た」は、実質的には現在形の文体の連続を避けつつ、文体にアクセントを付けるためのものとなっている。

総括すれば、このような「た」の働きも、「た」が原理的に事態変化を形成するところから導かれるものであると考える。テンス・アスペクトの「た」に見られる意味的な事態変化、また、前掲1～3のように「発見・想起・命令」の用法とされるムードの「た」も、「た」に於ける原理的な事態変化の働きを文意情報的に、或いは、意味的に実現したものと見る。また、「似た顔立ち」「とがった塔」の類の属性所有の意味については、現状として「似た（似ている）」「とがった（とがっている）」との事態認識を示すものであって、

過去の事態を不問、また、問題外としながら、その間の変化をいわば無意識的に捉えて「た」を用いるところであり、「壁に書いた文字」「刀で刺した跡」なども、現状と過去の事態との変化を無意識的に表現したものと考える。つまり、「た」の原理的な事態変化は表現全般にわたり広範囲に適用され、「た」の承ける語や文の内容によって意味の表れ方が異なるということである。どのような場面の表現に用いるかにより、幅広い表現を構成し得る「た」の原理は、「場面に依存する度合いが高」い日本語の特質をよく表しているとも言い得るであろう。

五、結び

現代語助動詞「た」は、第一義的には、事態変化をマークすると捉えることが有効であり、その内容としては、①文章情報上の理解に関わるもの（≡意味的な事態変化をもたらす）、②文の表出そのものに関わるもの（≡叙述の完成を事態変化として表す）、がある。

②については、例えば「いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。」（竹取物語の後、しばらく「けり」たり）の文が続き、その後に「妻の嫗にあづけてやしなはず。うつくしきこと、かぎりなし。いとをさなければ、籠に入れてやしなふ。」が続くなどの例から考えて、古典語の表現にも指摘し得る可能性がある。

上記は、「た」に見られるテンス・アスペクトの用法からムードの類の用法に至るまでの汎用性を、総じて事態変化をマークするというところに求めるべきことを述べており、また、そのような提案をしたものでもある。本論では「た」の理解を事態変化という枠組みに求め、これを最上位の認識とすることが「た」の本質的な理解を妨げない最善のものであると考えるところであり、然れば、所謂「夕形」が未来に使われ、主節の時制と一致しないと指摘される事例（例えば「明日、彼女が書いた本が出版される」）など、これまで時制との関わりで論じられた問題にも、新たな論点を持ち込むことになるであろう。

- 注1 工藤真由美(一九九五)は「完成性」で捉える(22頁)。
 2 例えば『日本語学キーワード事典』(朝倉書店 298頁、
 『ふしぎ発見!日本語文法。』(三弥井書店) 172~173頁の
 指摘など)。
 3 『日本語文法大辞典』200頁の指摘。但し、本論では、
 このような「た」は、現在形の表現に置換できないもの
 であり、アスペクトの範疇にあると見る(後述)。
 4 田中章夫は、助動詞「た」の意味を「大きくくくるも
 のは、やはり、以前の表現であるという点にはかならな
 い」(学燈社「古典語 助詞助動詞詳説」、153頁)とする
 が、ムードの「た」の説明には必ずしも適当でないとい
 ろがある。
 5 金田一春彦(一九七六)は、アスペクトとの関わりか
 ら「状態動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」「特殊動詞」の
 四類を挙げる。
 6 注5参照
 7 森山卓郎(二〇〇〇)には「状態を表す動詞や、属性
 状態動詞は、基本的にそのようなアスペクトの区別(筆
 者注、状態としてのとらえ方と動きとしてのとらえ方と
 の区別)をもたないと言える」(83頁)とある。
 8 所謂形容動詞の構成素となるサマ名詞(「静か」「健康」
 など)は、形容詞の場合とほぼ同じ扱いとなる。
 9 金水によれば「発話時から見た出来事の先後関係のこ
 と」。金水敏(二〇〇〇) 3頁
 10 工藤真由美(一九九五)は、「現代日本語のテンスは、

基本的に、発話主体の発話行為時を基準軸とするダイク
 ティックな、(過去→非過去)の対立である」(220頁)と
 している。

11 中島文雄(一九八七) 182頁

参考文献

- 井上 優(二〇〇二) 『た』の言語学』・第3章(ひつじ書房)
 金水 敏(二〇〇〇) 『日本語の文法2 時・否定と取り立て』・第1章(岩波書店)
 金田一春彦(一九七六) 『日本語動詞のアスペクト』(むぎ書房)
 工藤真由美(一九九五) 『アスペクト・テンス体系とテクスチャー現代日本語の時間の表現』(ひつじ書房)
 中島 文雄(一九八七) 『日本語の構造:英語との比較』(岩波新書)
 森山 卓郎(二〇〇〇) 『ここからはじまる日本語文法』(ひつじ書房)
 山口 明穂(二〇〇〇) 『日本語を考える』(東京大学出版会)
 山田 孝雄(一九三六) 『日本文法字概論』(寶文館)
 吉田 金彦(一九七二) 『現代語助動詞の史的的研究』(明治書院)